

## 巻 頭 言

学習院大学計算機センター所長 入 澤 寿 美

私が計算機センターに勤め始めて、はや26年になる。その内約10年間理学部の助手として計算機センターを外から眺める機会もあった。計算機センターは研究・教育機関であり、研究・教育活動が主目的であったが、ここ数年、計算機センターの役割が大きく変わってきている。組織的には大学の一研究所に過ぎないが、業務内容は大学のみならず小・中・高等学校のネットワークシステムや情報教育環境システムの設計に始まり、そのシステムのサポートやマルチメディア教室の設計、マルチメディア機器のメンテナンスなどサービス業として多岐に渡る業務の方が主になりつつある。この傾向はセンターとして喜ばしいことではないが、学習院の現状を見るに付け致し方ないとあきらめの境地である。

さて、急速な発展段階である情報化社会において、学習院の各学校でも情報設備が整えられつつある。しかし、教員が片手間に計算機システムを構築するのは色々な観点で問題点が多いと思われる。殆どの小・中・高等学校では教員がプライベートな時間を犠牲にして対応していると聞き、多くの大学では学部ごとの方針でシステムが違ったりすることもある。お金のあるところは、業者に設計を任せて作ってはみるものの、使い方もろくに分からないままメンテナンスもされずに埃をかぶっているという話も良く聞く。そのような中で、計算機センターは学習院の情報関係サービス業のプロ集団として必要とされているのだと思うし、学習院の色々な部署が不幸な結末を迎えることのないよう、精一杯要望に応じてきたつもりである。

では、今後、計算機センターのサービス部分はどうかあるべきなのか。現在、学習院内では、図書システムは図書館、事務システムは事務計算機室、教育・研究環境は計算機センターというようにシステム管理の住み分けが決まりつつある。これは、個々の学校にとらわれず、学校法人学習院という大きな枠の中でシステムの利用目的によって使い分けられているため、利用者にとっては便利な環境となっていると確信している。中でも、計算機センターの担当する教育・研究に対する情報処理環境は、利用者数もPC導入数も他に比べて格段に多いし、利用年齢層も幅広い。そのような中でも、利用者にとって使いやすい環境を整えていくことはもちろん計算機センターのサービス業務である。しかし、計算機センターが行うサービス業務で一番重要なものだと私が思っているのは、利用者の情報処理技術のレベルの向上への支援である。

情報処理機器が如何に進化したとしても、使うのは結局人間である。コンピュータやマルチメディア装置も所詮道具に過ぎない。コンピュータを使ってすばらしい仕事をするのも人間なら、事故

を起こすのも人間なのである。例えどのように高価なウィルス対策ソフトを導入してもデータベース等のアップデートを行わなければ意味が無いし、どのような高価なセキュリティーシステムを導入しても人的ミスでデータの漏洩を完全に防ぐ事はできない。それよりも、一人一人の認識が高くなればウィルスの被害に遭うことも少なくなるし、万一被害にあっても被害を小さくすることができると思う。結局、最後はそれを利用する人にかかってくるのである。そのためにも「常に利用者の顔が見える位置で、利用者の要望をシステムに取り入れ、利用者にもアドバイスすることにより、徐々にでも良いから利用者の質を向上させる」そのようなセンターであるべきなのではないかと私は思う。